



〈雜録〉労働時間と労働効率ニ關スル我邦ニ於ケル實驗的一例

豊原，又男

(Citation)

經濟學商業學國民經濟雜誌, 10(1):140*-145

(Issue Date)

1911-01

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00051669>



勞働時間ト勞働效能ニ關 スル我邦ニ於ケル實驗的 一例

秀英舍監事 豐原又男

泰西ニ於ケル古代ノ經濟學者及工業家ハ、職
工ノ就業時間長ケレバ長キ丈其利益ハ増加スル
モノナリトノ見解ヲ有シ、且ツ之ヲ誠ナリト信
ジタルガ如シ、故ニ當時ノ工業家ハ可成機械ノ
運轉時間ヲ長カラシメンコトヲ望ミ、勞働時間

ノ短縮ヲ以テ最モ不利ナルモノトセリ、現ニ彼
ノ有名ナル千八百三十八年英國ニ於ケル十時間
法案ノ議會ニ提出セラレタル時ニセニオル氏ハ
公開狀ヲ以テ十時間勞働ノ不法ニシテ英國本綿
工業ヲ萎微衰廢セシムルモノナルヲ論ジ、工業
家ノ利益ハ就業時間最後ノ二時間ニ生ズルモノ
ト痛論シ、斯業家モ亦セニオルノ所說ヲ以テ至
當ナリトセリ、然ルニ後千八百六十三年エジン
ボローニ開カレタル社會學大會ニ於テ、氏ハ前
說ノ誤謬ニシテ、十時間勞働ヲ各種工業ニモ適
用スベキコトノ利益ナルコトヲ自白主張スルニ
至リ、之レト共ニ各國ノ經濟學者ハ該問題ニ關
スル研究調査ヲ進メタルノミナラズ、工業家モ
亦其實際上ノ經驗ヨリ見解ノ誤レルコトヲ發見
シ、今ヤ兩者共ニ勞働時間ノ制限ハ何等工業上
苦痛ヲ與フルモノニアラザルノミナラズ、却テ
其結果ハ職工ノ體力精神共ニ健康活潑トナリ、
勞働ノ效能ヲ助長スルニ至リ、從テ其利益ヲモ

増進スルモノナルコトヲ覺ルニ至レリ、而シテ該疑問ニ對シ最モ有力ナル例證ト解説トヲ下シタルモノハ、獨逸ノ碩學ブレンタノー氏ニシテ氏ノ學說ガ更ラニ適確ナルヲ證シタルモノハ、同國フライブルグ大學教授シユルツエーゲーフアーニツツ氏ト爲ス、氏ハブ氏ノ學說ヲ奉ジテ英國ノ木綿工業及マルチンノザクセンニ於ケル織物業トニ就キテ、精細ナル研究ヲ遂ゲテ其裏書ヲ爲シタルモノナリ、其他最近理學者トシテ英名ヲ博セルエルンスト、アツベ―教授ノ如キ自身ノ管理セルイエナニ於ケル世界有數ノ眼鏡製造所トシテ知ラル、ツアイス工場ニ於テ實驗セル所ヲ發表シテ、勞働時間ニ關スル學說ノ誤リナキヲ公ニシテ其論據愈々鞏キヲ致セリトイフ。

若シ果シテ、歐米ニ於テ勞働時間ト勞働效能トニ關スル所見ガ此ノ如ク一定シタリトセバ、我邦ニ於ケル實況如何ハ、吾人ノ大ニ注意スベ

キ問題ナルノミナラズ、之ガ研究ハ一日モ怠ルベカラザル最重ノ事ナリトイハザルベカラズ、然ルニ吾人ノ寡聞ナル、之ニ關スル學說ヲ聞ク事久シキニ拘ラズ、實際的例證ヲ示シタルモノアルヲ聞カズ、頗ル遺憾トスル所ナリキ、此ニ於テ吾人淺學短才固ヨリ其任ニアラズト雖モ、身幸ニ工場監督ニ在ルヲ以テ、之ヲ實驗調査セント欲シタルハ、實ニ今ヲ去ルコト數年前ノコトニ屬ス、然カレドモ機未ダ熟セズシテ止ミタリシガ、昨年政府ガ多年ノ懸案タル工場法案ノ編成ヲ終リ之ヲ公表シテ其可否ヲ問フヤ、世論轟々トシテ一は一非各所說ヲ異ニシタリ、殊ニ本邦紡績業者ハ、時間ノ制限及ビ夜間ノ就業ヲ禁止スル旨ノ規定ヲ見、是レ紡績業ヲ滅亡セシムルモノナリトイヒ、或ハ之レガ爲メニ紡績業者ハ唯一ノ市場タル支那地方ニ於ケル貿易ハ皆無トナルベシトイヒ、或ハ輸出ノミカハ内地ノ需要ダモ辨ズルニ足ラザルニ至ルベシト唱導シ

テ、當局者ヲ威赫セリ、爲メニ工場法案ハ見事失敗ニ終リテ、當局者ハ法文ニ不備ノ點アリト稱シテ撤回セリ、此ニ於テ吾人ハ最早猶豫スベキニアラズ、果シテ斯業者ノ云フガ如ク、我邦ニ於ケル工業上勞働時間ノ制限ガ爾カク不利ニシテ機械ノ運轉時間ヲ延長スルノ有利ナリヤ、實際ニ就イテ研究調査センコトヲ期シ、最近二ケ年間即チ明治四十一年及四十二年ノ兩年度ニ於ケル、我舍印刷部ニ於ケル日常ノ成績ニ就キ調査ヲ開始シタリ、而カモ吾人ハ右調査ニ就キ何等職工長職工其他ニ警告スル所ナカリシナリ故ニ其ノ數字ノ眞ナルコト、及職工ヲシテ其間ニ於ケル豫備行爲ヲ爲スベキノ餘地ヲ與ヘザリヤ勿論ナリトス、今吾人ノ調査セル結果ハ左ノ如シ。

明治四十一年 自一月至十二月		印刷部勞働時數及一時間	
月別	平均ノ勞働成績表	一ヶ月總勞働時間	一時間平均
一月	機械總臺數	三〇	一、一、弱
二月	機械總臺數	三八、〇	一、一、弱

月別	機械總臺數	一ヶ月總勞働時間	一時間平均
一月	三〇	三七五、〇	一、一、弱
二月	同	五九〇、五	一、一、〇
三月	同	六六九、〇	一、二、強
四月	同	五八〇、〇	一、三、弱
五月	同	四三一、〇	一、二、〃
六月	同	三三三、〇	一、三、強
七月	同	三九九、〇	一、二、弱
八月	同	四二五、五	一、二、弱
九月	同	四一六、〇	一、三、〇
十月	同	四八五、〇	一、三、〃
十一月	同	五五四、〇	一、一、〃
十二月	同	六一九、五	一、二、〃
一月	同	五八八、五	一、一、〃
二月	同	四八〇、〇	一、一、〃
三月	同	四八五、〇	一、三、〃
四月	同	四一六、〇	一、三、〇
五月	同	四二五、五	一、二、弱
六月	同	三三八、〇	一、三、〇
七月	同	四六三、〇	一、二、〇
八月	同	六〇九、〇	一、二、強
九月	同	四八〇、五	一、三、強
十月	同	五六一、〇	一、二、〃

明治四十二年 自一月至十二月 印刷部勞働時間數及一時間平均ノ勞働成績表

八月	同	三五五、五	一四、〃
九月	同	三九二、五	一三、〃
十月	同	五四三、〇	一二、〃
十一月	同	四二四、〇	一一、〃
十二月	同	五九四、〇	一四、〃

備考 仕上高ノ噸數ハ印刷料紙ハ五百枚ヲ以テ一噸ト稱ス

由是觀之一時間平均ノ仕上高最モ少キハ常ニ勞動時間ノ最モ多キ四十一年三月ノ六百三十九時半ニ對スル十一噸弱、及ビ四十二年三月ノ六百六十九時間ニ對スル十二噸強ナルコトニシテ、且ツ何レノ月ニ於テモ比較的勞動時間多キ時ハ、却テ仕上高ノ少ナキコトノ證據ヲ得タルモノナリ、是レ即チ何ヲ意味スルモノナルカ、云フ迄モナク機械ノ運轉時間長キハ、必ズシモ生産高ノ多キモノニアラザルコトニシテ、從テ之ヨリ生ズル利益モ亦必ズシモ大ナリトスベカラザルコトヲ表明スルモノナリ、加之一般印刷業者ノ一ケ年間最モ多忙時期ニシテ機械運轉時間最モ長キ時ハ、毎年末十二月ヲ以テ然リト爲

ス、然ルニ同業者一樣ニ一ケ年ヲ通ジテ、利益ノ最モ少ナキハ十二月ニ如クモノナシトハ一般ニ唱フル所ナルヨリ見ルモ已ニ其眞理ノ誤リナキヲ言明セルモノトイフベシ。

尙之レト共ニ附加スベキ事ハ、製品即印刷物ノ良否ニ就キテ調査セル結果ナリ、吾人多年ノ經驗ニヨレバ、印物物ガ常ニ鮮明ヲ缺キ、刷色一樣ナラズ、或ハ刷色ニ濃淡ヲ生ジ、或ハ印刷枚數ヲ誤算シ、或ハ刷リ損紙ノ數多キ等ハ、皆ナ晝間ノ執業ニアラズシテ、概テ夜間若シクハ徹夜業ニ於テ印刷セルモノナルハ、吾人ノ明ラカニ證明スル所ニシテ、之等粗惡ナル印刷物ハ往々顧客ノ信用ヲ損シ、或ハ全然之ヲ損失ト爲ス場合多キモ亦是レナリトス、故ニ美術的印刷物又ハ精巧ナル技術ヲ要スル印刷物ノ如キハ、到底夜間ノ執業ニ於テ得ラルベキニアラザルコトモ、併セテ斷言セント欲スルモノナリ、次ギニ吾人ノ更ラニ報告セント欲スルモノハ、故佐

久間貞一氏在世中、我舍ニ於ケル活版部ト稱スル一部ノ、分撰ノ(活字ヲ拾フ作業ヲ爲スモノ)作業ニ於テ、八時間勞働ト九時間勞働トヲ實驗調査セラレタルモノニシテ、左ニ掲グルモノ即チ是レナリ。

自明治二十二年五月十五月間ニ於ケル分選部ハ至明治二十三年七月時間勞働成績表

年	月	九時間勞働ニテ人一日平均採字高	八時間勞働ニテ人一日平均採字高	差數
明治二十二年五月	五月	九、五	一二、一	二、六
同	六月	九、〇	一二、三	三、三
同	七月	九、三	一一、五	二、二
同	八月	九、三	一一、八	二、五
同	九月	九、八	一二、四	二、六
同	十月	九、五	一二、〇	二、五
同	十一月	一〇、三	一二、六	二、三
同	十二月	九、八	一一、七	一、九
明治二十三年一月	一月	八、五	一一、五	三、〇
同	二月	八、〇	一〇、五	二、三
同	三月	一〇、五	一二、七	二、二

同	四月	九、五	一一、五	二、二
同	五月	九、六	一一、七	二、一
同	六月	九、五	一二、一	二、六
同	七月	九、四	一一、三	一、六

備考

- 一 分選部ト云フハ原書ニ就キ活字ヲ採集スル仕事ニシテ活版工業ノ第一工程ナリ
- 一 箱數ト云フハ一定ノ分選箱(五號活字ニテ八百二十八個入ル)ト稱スル小箱ノ數ヲ示スモノニシテ之ヲ標準トシテ工程ヲ計算スルハ斯業ノ通則トス
- 一 人員ハ毎月十名宛ヲ選ビテ一ヶ月ツマ十五ヶ月間試驗シタルモノトス

是レ又全然八時間勞働ガ却テ九時間ノ勞働ニ勝サルモノアルヲ示スモノニシテ、時間ノ短縮ガ却ツテ好成績ヲ表ハス事ヲ證據立ツルモノト云フベシ。

以上述べタル處ニヨリ考フルニ、今ヤ泰西ニ於ケル勞働時間ニ關スル學說ノ、我邦ニ於テモ亦信ズベキモノアル事ヲ知ルニ足ルト共ニ、歐米ノ工業家又ハ企業家ガ、一時ハ工場法ニ反抗シ

或ハ十時間勞働ノ不法ヲモ唱ヘタルニモ拘ラズ其誤レルコトヲ知ルヤ、翻然トシテ多年固執ノ所說ヲ棄テタルノ卓見ハ先進國ノ工業家トシテ吾人ノ羨望ニ堪ヘザルモノナリト云フベシ、知ラズ本邦工業家ノ態度果シテ如何、吾人ハ諸氏ニシテ若シ之レガ反證ノアルアリトセバ、謹ンデ之ヲ聞カンコトヲ切望スルト共ニ、將來ニ於ケル研究ヲ要求セント欲スルモノナリ。

然リ而シテ政府當局者ハ、昨年撤回セル工場法ヲ修正シテ公私官民ニ諮問シ、工業界ニ於ケル研究論難贊否未ダ定マラザルガ如シ、故ニ吾人ハ一ハ學者社會ノ參考ニ供シ、併セテ工業家ノ調査資料タラシメンコトヲ期シ、茲ニ其調査ノ一端ヲ公表スル所以ナリ、讀者乞フ諒之。